

(別紙様式)

## 平成 28 年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究  
産学官連携フュージビリティ・スタディ  
共同研究集会 産学官連携課題設定集会

研究課題名: 北極域研究における日本の取り組みに関する将来展望

研究期間: 平成 28 年度～平成 28 年度

共同研究員	氏名	所属・職名
研究代表者	大畑 哲夫	国立極地研究所・特任教授
研究分担者(拠点外)	島田 浩二	東京海洋大学・教授
	高倉 浩樹	東北大学・教授
	石川 守	北海道大学・准教授
	松浦 陽次郎	森林総合研究所・チーム長
	檜山 哲哉	名古屋大学・教授
	野沢 徹	岡山大学・教授
	田中 博	筑波大学・教授
	堀 雅裕	宇宙航空研究開発機構・主任研究員
	山口 一	東京大学・教授
	中坪 孝之	広島大学・教授
	柴田 明穂	神戸大学・教授
研究分担者(拠点内)	杉本 敦子	北海道大学・教授
	榎本 浩之	国立極地研究所・副所長・教授
	菊地 隆	海洋研究開発機構・北極環境変動総合研究センター長代理・主任技術研究員
	中村 卓司	国立極地研究所・副所長・教授
	鈴木 力英	海洋研究開発機構・領域長
	原田 尚美	海洋研究開発機構・上席技術研究員
	杉山 慎	北海道大学・准教授
	猪上 淳	国立極地研究所・准教授
	田畑 伸一郎	北海道大学・教授
	末吉 哲雄	国立極地研究所・URA
共同研究員	氏名	所属・職名
研究代表者	大畑 哲夫	国立極地研究所・特任教授
研究分担者(拠点外)	島田 浩二	東京海洋大学・教授
	高倉 浩樹	東北大学・教授
	石川 守	北海道大学・准教授

	松浦 陽次郎	森林総合研究所・チーム長
	檜山 哲哉	名古屋大学・教授
	野沢 徹	岡山大学・教授

### 【研究の内容】

平成 29 年1月23日 13:00 から24日 15:00 に、JAMSTEC 東京事務所において研究集会を開催した。参加者は 12 名であった。

過去およそ 10 年の間に、北極域研究の方向性を議論する組織は大きく変化した。2005 年までは日本学術会議には極域研究連絡会が存在し、そこで極域研究に関して極地研が中心となって議論が行われていたが、学術会議の改組により極域研連は廃止され、20 期(2005 年 10 月から)に国際対応(現在は連携)分科会の下に IASC 小委員会が設置された。これらが日本において北極域研究の方向性を議論する唯一の組織であった。一方、IASC でも改組が行われ、2009 年に5つの WG が設置され、WG ごとに議論が行われるようになった。加えて日本国内では、2011 年に日本国内の極域研究者コミュニティを束ねるはじめての組織として JCAR が組織され、2014 年に JCAR により長期構想がまとめられた。JCAR 設立時より、JCAR と IASC 小委員会のそれぞれが果たす役割について、議論する必要性が認識されていたが、オールジャパン体制のはじめての北極研究プロジェクトである GRENE プロジェクトの一環として組織された JCAR が、プロジェクト終了後にどのようなようになるのか不透明であったことから、議論は進められなかった。

これまでに GRENE プロジェクト終了後、JCAR はボトムアップを重視する学会的な団体に移行することが決まり、ようやく、IASC 小委員会と JCAR の役割分担を議論することができる状況となり、今回のワークショップにおいて国内外の状況を整理し、議論を開始することとした。

上述の関連組織の変革に加えて、世界の北極域研究では、自然科学系の研究だけではなく、人文社会系の研究やその視点が重視されるようになってきている。北極域研究において先住民の関与が強く求められ、先住民の在来知やコミュニティとともに行う観測といったコンセプトが出され、重要な視点となっている。ASSW 2015 で開催された ICARP III でもこの点が強調されている。日本からの IASC WG メンバーは、当初、5つの WG のうち自然科学系の4つの WG に委員をだしていたが、2013 年からは人社 WG にも委員を出し、現在は5つの WG すべてに 2 名の WG 委員を出している。このような状況の中で、北極域研究についてどのように方向性を打ち出し、議論を進めていくかも、IASC 小委員会としての重要な課題である。

参加者から多数の意見が出され、IASC 小委員会の機能に関して、概ね以下のように合意がなされた。JCAR がボトムアップ機能を重視し、広くコミュニティから意見を収集するのに対し、IASC 小委員会は、その時々の世界の情勢を考慮し、重要課題を決めているための研究集会を設定するなど、北極域研究の方向性を決めて行く上で重要な役割を果たすべきである。今後も、議論を続け、必要な人材を次期 IASC 小委員会委員候補者としてリストアップしていくとともに、具体的な研究集会の課題設定について議論を継続していく必要がある。

本ワークショップでは、北極域に関する多数の団体、組織、プログラムなどの情報を共有し、IASC 小委員会が今後どのような役割を果たしていくべきかを議論した。

【研究論文や著書等】

なし

【研究発表】

なし

【特許等】

なし

【アウトリーチ、取材、その他】

なし